

ほたる

KAGAWA, Fuminoo / 佳川, 文乃緒

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

391

(終了ページ / End Page)

402

(発行年 / Year)

2011-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007130>

【研究ノート】

ほたる

佳 川 文乃緒

昭和十九年六月十九日。あの朝を、忘れることは出来ません。六十年経っている今でも。

不思議なことに、ろ子は、六月十九日の命日近くなると、「お姉ちゃん、ろ子だよ」と、わたしに存在を思い出させるのです。それは、わたしを急に不眠症にさせたり、身体がとてもだるくなったりと、そんな方法で知らせるのです。それが、梅雨時だと、あ、ろ子の命日だと、思い出すのです。

ろ子が亡くなった昭和十九年は、わたしは九歳、小学四年生でした。年子の妹の山本ひろ子、愛称・ろ子は八歳、三年生でした。ろ子は、十日ほど病んで亡くなりましたが、実は、ろ子が亡くなった元を作ってしまったのは、姉のわたしなのです。それだけに、ろ子の死は、忘れようにも、忘れられないのです。

あの時代は、普通だったのですが、兄弟は、わたしを頭に総勢五人いました。『産めよ増やせよ』と言われ、子供が多いことは、お国のために尽くしているということだったのです。

都会は連夜空襲で焼かれ、焼け出された人は着の身着のまま、ちょっとした知り合いでも頼っては、農村に逃れて行きました。わたしの家族も、そうした疎開家族でした。父の実家を頼ったのですが、貧しかった実家では、わたし達家族を受け入れられませんでした。そこを、近所の農家の主婦が見かねて、その農家の裏手にあった、八畳ほどの広さの物置を貸して

くれたのでした。本当に有難いことでした。

納屋に薄縁を敷いた一間に、親子七人が暮らし始めました。夜ともなると、横に寝る者、縦に寝る者、一枚の煎餅布団に、上と裾から刺し違えに寝ました。風邪でもひいたりすると、特権として、枕元の布団に一人で寝ることが出来るのでした。

男の人達は、かなりの高年齢でも、兵隊として、戦いに行っていました。が、父はそれすら出来ないほど体が弱く、一度召集されたけれども、病弱のために帰されて来て、その狭い家の中で、ヒステリックに詰る母の下で、小さくなって暮らしていました。それでも、昼間は自転車で出かけて、軍事工場の下請けの町工場で働いていました。

母は、今の医学では『境界性人格障害』と解明されている精神の病気だったせいで、感情の起伏が激しく、心がすさんでいました。しかし、時代が悪かったために、治療を受けることも無く、結局、嫌われながら生きてしまった人でしたが…。それで、わたし達子供は、母親よりも、納屋を貸して呉れていた大家さんの主婦を「おばちゃん」と呼んで、おかあさん代わりに、慕うようになりました。

大家さんのおばちゃんには、せっちゃんと言う二歳の女の子がいました。その子はいつも、おかあさんのもんぺのお尻に掴まっては、ちょこちょこと付いて歩いていました。それで、「せっちゃんのトゥネッコ」と、呼んでいました。トゥネッコとは、子馬と言う土地言葉で、子馬はいつでも、カアサン馬の傍を離れないで歩いているからなのです。それで、せっちゃんはトゥネッコだったのです。わたしはよくせっちゃんの子守りをしました。せっちゃんのお父さんは戦争に行き、おばちゃん一人で、田んぼも畑も守っていました。それで、うちの母が、出来ないながら畑仕事を手伝わせてもらって、お礼に食料を頂いていました。おばちゃんは、母にもとても優しくしてくれていました。わたしもろ子も、おばちゃんの役に立ちたくて、弟達の子守りを兼ねて、大家さんの庭で、せっちゃんの子守りをしました。

五人の兄弟の、ろ子の下は三人とも男の子でした。どの子も、栄養失調

で、目ばかりぎょろぎょろと大きくて、あばら骨がぎろぎろしているような体だったけれども、悪戯盛りで、狭い家の中は動物園のような騒ぎでした。

わたしとろ子は、女の子らしく、ちょっとおセンチで、騒々しい家から抜け出して、唱歌を歌いながら、川原の堤の上を散歩したものでした。ろ子は美少女で、白く透き通るような肌をして、茶色に近い柔かい髪が、天然のカールをしていました。大きな瞳も茶色。だもので、学校で友達に、敵国人だと虐められていたみたいでした。わたしは、赤いカンナの花や、紫色のシオンの花を、ろ子の髪に挿してあげたものでした。洗い晒しの洋服を着ているろ子でした。勿論、わたしもぼろを着ていました。もっとも、ぼろを着ていたのは、わたし達だけではなく、あの時代の子どもはみんなそうでした。ろ子は花のかんざしを付けると、見違えるほど綺麗で可愛らしかったのです。西洋のお姫さまみたいだと思いました。

どうやって手に入れたのか、今となっては思い出せないけれども、ろ子とわたしは共通の宝物として、便箋の表紙を大切に持っていました。表紙を一枚だけ。その表紙には、蔦の葉が絡まった、レンガ造りの西洋のアパートと、その玄関の前に、少女が一人立っている絵が描かれていました。美しい西欧の絵は、二人の憧れを駆り立て、絵の中の少女が穿いている水色のスカートを、お揃いで穿いたつもりで、ヒマの木や、かぼちゃが隙間もなく植えられている河川敷を、川風に頬を撫ぜさせながら、夢見心地で歩いたりしました。

物置の家はきついものでした。梅雨時は最も息苦しく、降り続く雨は、家の中も外も変わらないほど湿らせるのです。そんな中で、たった一つ慰めになったのは、雨の合間に飛び交い始める蛍の、青白い透明な光でした。その晩光る最初の一匹を見つけようと、ろ子とわたしは、団扇で蚊を払いながら、家の前に立って待ったものです。そして、濡れた露草の陰に、淡い淡い最初の灯火が揺れたのを見つけて、ろ子は、「あ、居た、わあ、ほたる…」と、あの子らしい、細く控えめな歓声をあげるのです。可愛らし

い声でした。わたしは、最初の蛍を見つけても、ろ子が気が付くまで黙っていて、ろ子の歓声を聞くのを楽しみにしていました。停電も多いし、灯火管制で、電気に黒いカバーを被せておいたあの頃の夜は、蛍の光が一際美しかったのです。

わたしの家族は、空襲で焼け出されて来た疎開一家だったとは言っても、東京では、牛乳配達人だった父の収入だけで、都会の片隅に、吹き溜まりのように暮らしていました。だから、夏祭りだと言っても、浴衣を着せて貰えるようなことはなかったのです。そんな中で、わたし達姉妹で共有して着る浴衣が一枚だけありました。まだ東京に居た時に、近所の子供のお古を貰ったもので、大分くたぶれてはありましたが、青や赤やの朝顔の花を散らした四つ身の浴衣でした。わたしとろ子は、その浴衣を、一晩毎に交代で着るのが、ささやかな楽しみでした。それで、蛍を見る夜は、わたししか、ろ子のどちらかが、その朝顔の柄の浴衣を着ていました。

あの日。忘れもしない、六月九日でした。わたしは、学校の友達から、さくらんぼを帽子に一杯貰って来ました。わたしはそれを、ろ子と二人だけで食べました。子供は、珍しい物が手に入ったりしたら、先ず母親に見せて、母親に食べさせたいと思うのが普通でしょうが、わたし達の母ときたら異常でしたから、それが母親の好物であったりすると、取り上げて、自分が全部食べてしまうか、隠してしまうかするのです。だから、わたしは、さくらんぼを、最初から母には見せずに、ろ子だけを、大家さんの裏方へこっそりと呼び出し、軒下に座って、二人で思う存分に食べました。

赤い赤い宝石、さくらんぼ。それは、例えようもない程美味しく、貴重な果実でした。とは言え、現在の店頭で売っている桜桃の、とろけるような甘さは無くて、庭先の木で、自然に熟れた甘酸っぱさでした。

ろ子は喜んで、「お姉ちゃん、ありがとう」を、わたしが「そんなに言わなくていいよ」と言う程に繰り返しながら、かざして眺めては、「綺麗ねえ」と感嘆し、二つ並んだ実に「こちらがお姉ちゃん、これがろ子」「お姉

ちゃん、ろ子」「お姉ちゃん、ろ子」と、立て続けに、ほとんどをろ子が食べてしまったのです。そして…。

その夜。二人は高熱を出してしまいました。激しい下痢で、息も止まるかと思うほど苦しみました。父が、外の井戸から、水をこまめに汲み換えて来ては、額を冷やしてくれました。母は、そんな時でも冷たいものでした。熱で気も遠くなりそうなわたしに、「桑の実でも食べたんだろう。よく洗いもしないで食べるから、罰が当たったのよ。こっちは忙しいんだからね、用事を増やすばかりだ」などと、詰るのです。そんな中でも、三日ほどで、わたしは熱が下がり、徐々に回復して来ましたが、ろ子の高熱は下がりません。ろ子は「お腹が痛い…」と訴えて、身を振って苦しんでいました。

六日目ごろ、わたしはふと、ろ子は死ぬんじゃないかと思いました。学校に行っても、今頃、ろ子が死んでしまっているのではないかと、憑かれたように、走って帰りました。ろ子の容態は、更に悪化し、ますます苦しそうでした。父は、無理に頼んで工場を早退して来ては、ろ子を看ていてくれました。母は相変わらず、余り心配そうではないのです。

七日目、外の井戸端で洗い物をしていた母と、傍に立っている父が大喧嘩をしていました。父はろ子を医者に診せようと言っているのです。隣村に老医者が一人だけ居ました。金が無いと、母は父の申し出に反対です。こんな母に、父は何時に無く言葉を荒げ、激しい夫婦喧嘩になったのです。母は癇癇を起こすと、物を投げ付けるのです。母は洗っていた瀬戸物を、父に向かって投げました。この時だけは、わたしも中に割って入り、母に食って掛かりました。

狭い家の傍で、こんなことをしていれば、寝ているろ子に聞こえない訳はありません。

「お姉ちゃん、来て」

と、ろ子がかallingている、蚊細い声が聞こえました。

「お医者さんに、診て貰わなくても、大丈夫」

ろ子が、こう言ったのです。

その夜辺りから、ろ子は、身を振って苦しまなくなった代わりに、うつらうつらとするようになりました。熱は相変わらず下がりません。わたしは、ろ子が本当に死んでしまうという予感に怯えました。なるべく、ろ子の傍に居てやりました。ろ子は時々目を覚まし、わたしか父が居ると、安心したように、また、うつらうつらするのです。

だんだん弱っていくろ子。わたしは、再三、母に医者を呼んで呉れるように頼みました。父も、給料の前借を申し出たようなのですが、それまでに、目一杯の前借をしているために、聞き入れられないとのことなのです。

六月十八日、学校から帰ると、ろ子が荒い息をしながら眠っている顔に、それまで見たことの無い、苦しみと悲しみが表れていたのです。「ろ子」と、呼びかけて、手を握ると、ろ子も僅かに握り返してきました。このままでは、ろ子は本当に死んでしまう。わたしは、母に頼みました。すると、母は、こう言ったのです。

「あの子は、もう頭へのぼっちゃったんだよ。何も分からなくなった子供なんか生きていれば、親兄弟の一生のお荷物になっちまうんだから。死んだ方が、本人のためにもいいんだよ。あの子は弱い子だから、病気になったんだよ。子供はまだ他に四人もいるからね。みんなやっと生きているんだ。そんな中で、弱い子は生きていけないんだ。可愛そうだけど、仕方ないのよ」

「違う。ろ子は頭にのぼってなんかいない。ろ子は弱い子なんかでは無い」

母がまだ何か言っていたけれど、わたしはもう、母には頼みませんでした。わたしが走ったのは、大家さんの家でした。

「おばちゃん、お願い。お医者さん呼んで。ろ子が死んじゃう」

おばちゃんはすぐに、医者に連絡をしてくれました。

その夜、わたしと父は、一睡もせずに医者を待ちました。灯火管制で暗くした電灯の薄明かりの下で、ろ子は、小さい肩を激しく動かして、息をしていました。さすがにこの二、三日は、ろ子の容態を案じて、弟達も息を詰めて静かにしていました。

「この暗がりでは、ろ子が可愛そうだ。栄子、電気を点けてやれ」

父がわたしに、こう言うのです。父が、こんなに決然としてもものを行ったのを聞いたのは、初めてでした。わたしは、はっとして母を見ました。母は、隅の布団の上で横になり、末の弟に、乳を含ませていました。「そんなことをしたら、敵機に見付かるから駄目だ」と言うと思った母が、無言で了解したので、わたしは、すぐに、電気を覆っていた黒い布を外しました。家の中が、ぱっと明るくなった時、ろ子が、はっきり言ったのです。

「ほたる」

言い終わって、ろ子は、一息大きく息を吸って、その息が最期でした。わたしの体を、衝撃が走りました。

「ろ子、しっかりしろ」

父が叫んでいる声が聞こえました。

「みんな、おいで。ろ子の最期だよ。ろ子を見守ってやれ」

遠巻きにして竦んでいた弟達を、父が集めました。

「ろ子とお別れだ」

わたしはろ子に縋りました。ろ子の体は、葱のように細くなっていました。父は大声でろ子の名を呼び続けながら、泣きました。弟達も泣きました。さすがの母も、末の弟を抱いたまま、傍に来て座って、前掛けの裾で目頭を押さえていました。

わたしは、母がろ子を見殺しにしたのだと思いました。泣いている母を見て、何を今更しらじらしいと思いました。悔しさに、むしゃぶりついて行きたい気持ちでした。しかし、わたしは、何故か、母を責める勇気が出ませんでした。子供だったので、無理もないと思うけれども、でも、あの時、ろ子のために、母に一言でも抗議出来なかった、そんな時でも、母

を怖がっていた自分が、今でも悔やまれます。

ろ子は一匹の「ほたる」を見て旅立ちました。あの、何も無い時代に生きた八年という、短いろ子の一生で見た、一番美しかったものは、蛍だったのでしょ。あの夜は、雨が降っていて、蛍は飛んでいなかった。ろ子がこの世で最後に見た蛍は、四十ワットの裸電光でした。ろ子がこの世で最期に言った言葉は、「ほたる」でした。そして、ろ子がこの世で最後に食べた、一番美味しかったものは、疫病菌の着いた美しい宝石。さくらんぼでした。

六月十九日は、雨があがっていて、朝が広くひろがり、大家の屋根の上で、烏がやけに鳴いていたのを思い出します。早朝、おばちゃんが来てくれました。おばちゃんは泣いてくれました。せっちゃんも、眠そうに目を擦りながら、おかあさんに付いて来ましたが、家の中の異様な空気に、眠気も覚めて、おかあさんの脇に立って、じいっと、ろ子を見ていました。せっちゃんが生まれて初めて見た死んだ人、それがろ子だったし、わたしだって、死んだ人を見たのは初めてでした。でも、それが、ろ子だなんて…。

ろ子は静かに横たわっていました。ぽーんと置かれた人形のようにでした。この日だけは、布団を一枚分大びらに一人締めにして寝ていました。みんな、息を詰めて、そんなろ子を見ているだけでした。

「医者が間に合わなかったねえ」

おばちゃんが、ぼそっと言った時、

「てめえが早く呼ぼうとしなかったからだ」

父が母を詰りました。

「呼ぶ金がどこにある」

母が言い返しました。

「何を…」

母に殴りかかった父の腕を、おばちゃんが止めました。父は手を下ろす

と、肩を落として、ろ子の傍らへ経たり込みました。それは、いつもの、痩せた父の姿でした。でも、ろ子の為に見せた、母への父の怒りに、わたしは、密かに溜飲を下げるのでした。

おばちゃんは、「うちに新しい敷布が、一枚だけあるから、持って来る」と言って、せっちゃんの手を引いて、急いで出て行きました。おばちゃんが、敷布を持って戻って来るまで、家の者は、動かずに黙りこくっていました。戻って来たおばちゃんの後から、せっちゃんが後を追って、泣きながら付いて来ました。

おばちゃんが、敷布を敷いてくれようとして、ろ子を抱き上げると、ろ子の首が、かくんと仰け反って、ま近に居たわたしの目の前に、下がったのです。蠅細工のように白い肌、薄く開いた目の中に、半分見えた瞳の力無さ。ろ子は、本当に死んでしまった。

「おかあちゃん、最後に抱いてやって」

と言うおばちゃんの言葉に、母が反応する前に、父が、いとおしそうに抱き取りました。母が布団を直して、敷布を敷きました。真っ白い敷布の上に寝かされたろ子は、いかにも気持ちが良さそうでした。

わたしは、ろ子の薄い胸の上で組ませたか細い手に、あの便箋の表紙を挟んで持たせ、朝顔の浴衣を掛けました。

わたしは、子供達のお守りを言いつけられて、せっちゃんも一緒に、みんなを大家さんの庭へ連れて行きました。おばちゃんの連絡で、隣組の主婦達が集まって来て、葬式の段取りを始めていました。胡瓜やトマト、南瓜の煮つけ、そんなものでした。疎開者の家に、近所の人々が集まってくれたのは、土着のおばちゃんの顔に付けてであったのです。こんなに賑やかに人が来たのは、初めてのことでしたから、弟達は、代わる代わる家の様子を覗きに行きました。

昼近く、馬に乗って、医者が往診に来ました。「もう、遅い」わたしは、叫びたい思いでした。結局、医者は、線香をあげて帰って行きました。医者が間に会わなかっただけではなく、寺の住職も招集されていて留守との

ことで、ろ子はお経さえあげて貰えなかったのです。それでも、おばちゃんが、朝夕仏壇にあげているという、自己流のお経を唱えてくれました。

さて、どこへ埋葬するかが、問題になったそうです。実は、父の実家にも正式な墓は無く、結局、誰の発案だったのか、家の裏方にある、割合に低くなだらかな里山の上にある雑木林の際に、傾きながら六基ばかり並んでいた古い小さな無縁仏を無断借用して、その墓石の前に、ろ子を埋葬させることになりました。

ろ子は、有り合わせの木っ端で作った棺桶に、便箋の表紙一枚だけを持って入れられ、リヤカーに乗せられ、父に引かれ、兄弟に横を守られながら、山道を登って行きました。わたしは、お棺の上に、朝顔の浴衣を着せ掛けました。末の弟を背負った母も、神妙に付き添っています。わたしは、母の顔を見るのも嫌で、わざと離れて歩きました。せっちゃんをおんぶして、おばちゃんが来てくれたことが、どんなにか心強かったことでしょう。せっちゃんは、おかあさんの背中で、ずっと眠っていました。

父とおばちゃんや、近所の人達の力で、六基並んだ古い墓石の前に、穴が掘られて、ろ子の小さなお棺が入れられました。埋葬に当たって、また、母との小競り合いがありました。それは、お棺に掛けた浴衣を、母が剥がして抱え込んだのです。

「なにをするの、おかあさん。ろ子が可愛そうだよ」

さすがに、わたしも我慢がならなかったのです。

「何言ってるの、この浴衣一枚しかないんだよ。もう手に入らないんだよ」

「いいから、ろ子にあげて」

わたしは、泣き叫びながら、母の手から浴衣を奪い取り、お棺に掛け直しました。母はもう取り返しはしませんでした。

おばちゃんが、ろ子のために、実に、ろ子らしい戒名を考えてくれたのです。

『露光童女』

何と、美しい。ろ子は、露の光となって、消えました。ほたるの灯火を映しながら…。

その日から、わたしは、学校から帰ると、毎日、ろ子に会いに、山のお墓に行きました。野の花を絶やしませんでした。蛍を沢山集めて、卒塔婆代わりに木切れを立てたお墓の周りに、放ったりしました。

あれは、夏も終わった頃だったと思う。あれは…。雨の日でした。雨降りなので、山道の途中で、畑帰りの人に遭うこともない夕暮れでした。それでも、わたしは、ろ子に会いに行きました。こんな寂しい所に来るのだから、学校が退けたらすぐの、早い時間に来ればいいものを、傘が空くのを待っていたからです。七人家族に二本の傘しか無かったからです。

そこで、わたしは見たのです。わたしは、傘を投げ出し、立ち竦み、震え出しました。ろ子が何処かへ行ってしまったからです。ろ子を埋めた場所が…、ぐうんと沈んで、大きな窪みになっていて、池のように、雨が溢れていたのです。ろ子が、墓地から抜け出し、露の光になって消えたのです。

「ろ子」

「露光童女」

どうして穴があいたのか。それは、お棺の蓋が腐って落ちたため。と、大人になって気付きましたが…。

戦争が終わり、一家は東京に戻りました。そこでも、バラックの借家住まいでしたが、やがてわたしは、美容師の見習いになり、住み込みとして、家を離れました。以来、弟達に学費を仕送ったり、その間には、父を看取ったりと、結婚もせずに、夢中で働いてきました。そして、今年の春、長年介護してきた母を送りました。

わたしは、ろ子に会いたいと思いました。今日、あの子の命日に、思い立って、わたしは中央線に乗り込みました。

疎開先だった田舎は、すっかり変わりましたが、ろ子が眠っている裏山は、多少畑が多くなったりしている程度で、概ねあの頃と同じ佇まいです。六基の古い小さな無縁さんも同じように傾きながら、ろ子を守ってくれていました。ただ、裏山が変わったことと言えば、雑木林の脇の、農道の一本が整備され、今は、そこを車が通っていたことです。それで、駅から墓地の近くまで、タクシーで来るようになりました。

今年も、今日、六月十九日は、雨模様でした。駅に着いた頃には、ちょっと傘を広げましたが、濡れた草に、深く覆われて眠っている、ろ子と話しているうちに、いつしか空はすっかり晴れ渡り、雨雲に隠されて見えなかった南アルプスの美しい稜線が、茜色の夕焼け空を横切っていました。約束の時間が来ていて、タクシーが、農道で待っていました。タクシーが走り出しました。

「今はもう、この辺り、蛍は飛びませんのでしょうかね」

「ええ、農薬散布で、絶滅しました」

「そうですか…」

完